

American Rock Lyric Landscape

—アメリカン・ロック・リリック・ランドスケープ—

ロックの歌詞から見えてくるアメリカの風景

文=ジヨージ・カックル

イラストレーション=花井祐介

第22回

ジェリー・ジェフ・ウォーカー 「LAフリーウェイ」

夢破れたLAから立ち去る男の心象風景



Jerry Jeff Walker
"Jerry Jeff Walker"
MCA ◯ MCA37004 [1972]
⇒ Raven [Australia] ◯ RVCD320

ったので、トイレでは長蛇の列。洗面器を便器に使っていた男性もいたぐらいだ。テキサス人は超ワイルドだった。これを「ワイルド・ワイルド・ウェスト」というんだけど、一緒に行った友達の話によると、女性の方も同じだったみたいだ。そっちの方は想像したくないけど。

ジェリー・ジェフ・ウォーカーは当時スパースターだった。ライブでは、73年のヒット・アルバム「Viva Terlingua」の曲を中心に演奏して盛り上がりつつあったが、意外にもそのアルバム以外の一曲「LAフリーウェイ」で観客はさらにすく盛り上がった。俺にとっては初めての曲だったからちよつと面食らったが、あとで調べると、テキサスではこの曲が72年にヒットしていたんだ。その会場でその曲を知らなかったのは、きつと俺だけだったのかもしれない。

「LAフリーウェイ」はガイ・クラークの作詞作曲したで、ガイのヴァージョンは75年のデビュー・アルバム「Old No.1」に入っている。対して、ジェリーの歌詞は少し違う。ジェリーはきつとデモカライヴでしか聞いていなかったんだろうね。

ルしていた。次に出了たのは、当時テキサスで注目されていたテキサスのソングライター・ラスティ・ウィアー。「ドント・イット・メイク・ユー・ウォント・トゥ・ダンス」が大ヒットしていたころだ。

当時のテキサスでは18歳から合法的に酒を飲めたので、みんな16歳ぐらいから飲んでいたと思う。観客の若者はまだ大人っぽい飲み方がわからず、ほとんどがビールだ

この曲を初めて聞いたのは、75年にテキサスのダラスを旅していたときのことだった。大きなロデオ・アリーナで、ジェリー・ジェフ・ウォーカーのライブがある聞いて友達と見に行つたときのことだ。

前座のトップ・バッターは、まだ「マルガリータヴィル」でスパースターになる前のジミー・パフェット。その時から彼は、すでにカリブの忘けるイメージでアピー

彼女に命じる言葉から始まる。次の「good wishes」には色んな意味が込められていて、つきあいを続けたい人やお世話になったことを伝えたい人、ありがとうといいたい人を書き留めておいてくれ、というようなニュアンスを表現している。その次では、大家にはさよならを言っておいてくれと頼んでいる。自分は大家には会いたくないんだね。「son of a bitch」あの野郎は「always bored me」いつもつまらな

かった、つまり俺をつんざりなせる野郎だった、と大家の悪口を言っている。次は、LAの新聞を全部捨ててくれ、とたまった新聞の処分を頼んでいる。アメリカでは仕事を探す時、新聞で調べらんだ。この歌詞を読むと、主人公の男は仕事が見つからなかつたのだと思う。

あのカビが生えているヴァニラ・ウェファスも捨ててくれ。大きな箱に入っている安いウェファスは、若者の家にはよくある。このコンクリートにはさよならだ。LAは高速道路だらけの街だから、ここからもつと自然があるところに俺は戻りたい、と歌っている。どこか裏道の、まだ舗装

されていないところに、と。この「get me」は「買う」という意味ではなく、例えば、いい空気も手に入れるという感じで使っている。

(chorus)
If I can just get off of this LA freeway
Without getting killed or caught
I will be down the road in a cloud of smoke
To some land I ain't bought, bought,
bought

ここからはサビだ。殺されたりつかまつたりしないでこのLAの高速道路から下りられれば、どこかまた当てもない土地を目指して、煙を噴き出しながら突き進む。この時代の人ならわかると思うけど、前半では、ドラッグを持っていたりやったりするときに高速で捕まりたくない、という気持ちも滲ませている。LSDなんかやって車を運転するのはクレイジーだけだ。

次の「I will be down the road in a cloud of smoke」は、車が出す排気ガスのことだけでなく、よくカートゥーン(漫画や

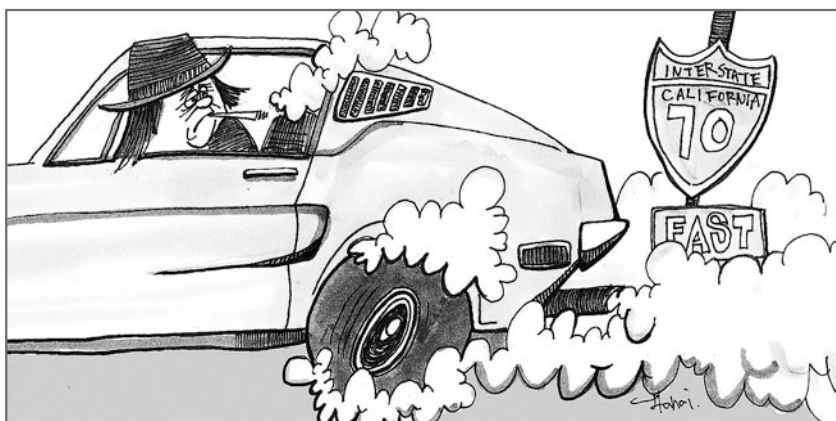
Pack up all your dishes
Make note of all good wishes
Say good-bye to the landlord for me
That son of a bitch has always bored me
Throw out them L.A. papers
And that moldy box of Vanilla Wafers
Adios to all this concrete
Gonna get me some dirt road
backstreet

男が、食器を全部パッキングしてくれと

子供向けのアニメーション)でも見るよね
速く走る時の描写で、車や動物などの後ろ
から煙が尾を引いているようなニュアンス
だ。

And it's here to you old Skinny Dennis
The only one I think I will miss
I can hear that old bass singing
Sweet and low like a gift you're
bringing
Play it for me one more time now
Got to give it all we can now
I believe everything you're saying
Just to keep on, keep on playing

ここからはLAのいい思い出話になる。
LAで友達になったスキニー・デニスとい
う人に向けて歌っている。'skinny'とはヤ
セッポチのこと。デニスのあだ名だろう。
'here to you'とは、あなたに捧げる、乾
杯をするみたいにデニスに捧げること。
'別れが悲しいのは君だけだ。デニスは
いい音を出すベースマンみたいだ。俺にはあ
のベースが宝物みたいに歌っているのが聞
こえる'。彼の素晴らしいベースプレイは、



まるで贈りものようだといっている。甘
くて低くてね。ちなみに、この二つの言葉
'sweet and low'は、ブラック・スピリチ
ユアルの「スウィング・ロウ、スウィート
・チャリオット」を思い起こさせる。そう
いえば、人工甘味料の(スウィート&ロ
ウ)の箱にも音符が描かれている。'すこ
く安らかな曲で、心を落ち着かせてくれ
んだ。そしてもう一度俺に聞かせてくれ。
次の'Got to give it all'は、全部あげる
ではなく、100パーセントがんばろうと
いう意味だ。君が言っていること全
部信じているよ。ただひたすらベースを弾
き続けてくれなにか。'Keep on
playing'という言葉が、これは演奏を
続けることだけじゃなくて、そのまま生
きていくということの意味も込めている。

(chorus)
And you put the pink card in the
mailbox
Leave the key in the front door lock
They'll find it likely as not
I'm sure there's something we have
forgot

Oh Susanna, don't you cry babe
Love's a gift that's surely handmade
We got something to believe in
Don't you think it's time we're leaving?

ここからまた男の、彼女に向けての話に
戻る。ピンクのカードをメールボックスに
いれてくれといっているが、このピンクの
カードはよくモーターに泊まる時に書くカ
ード。今はコンピュータ世界なのであまり
見ないけど、昔はいつもピンクのカードに
宿泊日数などを書き込んだものだ。この曲
を聞いていると、彼らはモーター暮らしの
ようだ。LAによくあるホテルを思い出す。
U型の建物で、中央にプールがあったりす
るところをだ。

鍵はフロント・ドアに差し込んだまま
でいいよ。きつと支配人はすぐに鍵を見つ
けるだろう。アメリカでこんな感じのモ
ーターに泊まる時は料金は先払いだから、
鍵を勝手に残して出て行ってもかまわな
いんだ。

きつと俺たちは何かをやり忘れてい
るんだろかね。ここで、スザンナ、泣くな
よ。と、彼女の名前がいきなり出てくる。

実はスザンナは、ガイ・クラークの奥さん
の名前だ。そして、泣くなというのは、ス
ティーヴン・フォスターの40年代のミン
ソレル・ソング「おおスザンナ」にかけ
ているんだ。その歌詞はこうだ、'Oh, Su
sanna, do not cry for me'。

「愛は手作りの贈りものだ」。ここでガ
イは、LAはすべて人工的で、手作りのも
のがないみたいだに歌っている。まだ俺た
ちには信じるものがあるから、もうLAか
ら出るべきだろう。そう思わないか?」

ちなみに、「LAフリーウェイ」を収録
したアルバム「Jerry Jeff Walker」の裏ジ
ヤケットには、フォルクスワーゲンを背景
に撮られたガイとスザンナと思われる女性
の写真が載っている。その横には、'タウ
ンズ・ヴァン・ザント、ガイ・クラーク、
ゲイリー・ホワイトそして私は、7〜8年
前、テキサスのヒューストンに住んでいた
そのころ、ガイはギターを

作っていた。私はしばらく
の間、ファン・ストリー
トにあるガイとゲイリーの
家に居候していたんだ。』
というジェリーの一文も掲

載されている。

ガイ・クラークはこの曲をジェリー・ジ
エフ・ウォーカーに取り上げられて、その
名前を知られるようになった。そして、そ
の後さまざまな人がガイの曲をカヴァーす
るようになったんだ。ディテールが細かく
ストーリー性があり、歴史的な背景をも歌
った彼の曲は、テキサスのソングライター
たちの見本になり、またジミー・バッフェツ
ト、ジョニー・キャッシュ、エミルー・ハ
リスといったレヴェルの人たちがカヴァー
している。

俺はこの曲を聞くと、若い頃に高速道路
を運転していたときのパラノイアを思い出
す。ちなみに「freeway」が、無料の道路と
いう意味じゃないことは知っていただろう
か? 信号や踏切など、車が停車するところ
がなくて、自由に走れるからフリーウェ
イというんだ。



ジョージ・カックル /
GEORGE COCKLE
ラジオ・パーソナリティ。
1956年、鎌倉生まれ。
18歳で新宿2丁目のロッ
ク・パーク<開拓地>で、
音楽の世界にのめり込
む。ハワイアンなどの
CDをプロデュースする傍
ら、インターFMでは音楽
番組「レイジーサンデー」
のパーソナリティをつと
め、音楽通ぶりを披露。
さらにサーフ・イベントな
どのMCでも活躍。
http://whatsupmusic
inc.com